

# 20世紀初頭における商務印書館の教科書と日本

呉 倩

## はじめに

今日でも中国屈指の出版社として知られている商務印書館は1897年に印刷所として設立された。百十数年の成長の歩みは近代中国における出版事情のみならず、教育、社会、文化、ひいては近代史全般にわたって注目すべきである。清王朝の末期に突入した20世紀初頭において、科挙に取って代わる近代的教育制度は始まったばかりであった。人々は西洋知識に対して興味こそ示していたが、学校教育の具体的な内容については茫然としていたのである。そのような時期に、1904年に商務印書館より『最新国文教科書』と題した教科書が出版され、初版があつという間に4,000冊、売り切れたとされている<sup>1)</sup>。この教科書はなぜこれだけ人々の注目を引きつけたのか。それにはどんな特徴があるのか。『最新国文教科書』の出版に先立って、商務印書館は日本の出版社である金港堂と1903年頃より合弁経営を始めており、金港堂から日本人専門家が派遣されている。そのため、商務印書館の一連の教科書には、日本の教科書編纂の特徴が反映されていると考えられる。本稿では、『最新国文教科書』（全十巻）の編纂に携わった日中二つの出版社の歴史に注目する。そして、同教科書の編纂経緯と編纂に直接携わった日中の編纂者について考察する。また同教科書に採用された教授法や、教材内容の具体的特徴を提示し、明治期の日本の小学読本の影響を検証していく。

## 1 商務印書館の経営と金港堂

### 1.1 商務印書館の経営者と人材

商務印書館は1897年に上海で成立した。創設者の夏瑞芳（1871-1914）と鮑兄弟（鮑威恩、鮑咸昌）はいずれも印刷所あるいは出版社で働くベテラン職人であった。この三人は同じ基督教系の学校を卒業した基督教信者であり、親戚同士でもあった。当初、商務印書館の事業内容は他社の印刷を受け負うものに留まっていたが、この状況に創設者の夏は満足していなかった。商務印書館の事業の中心は印刷ではなく、出版にあるべきだと意気込む夏はすぐさま実行に移した。1902年に夏は当時南洋公学に在任中の張元済を招き、商務印書館の編集責任者として任命した。張の参加は商務印書館が印刷工場から出版社への転向のきっかけとなった。

張元濟（1867-1959）は1892年に科挙試験に合格し、翰林院の庶吉士、総理事衙門の専門官まで昇格したが、1898年の戊戌維新に参与したせいで左遷され、上海にある南洋公学に就任していた。仕事上の関係で、夏は図書出版のことについて張に何度も尋ねたこともあり、その結果商務印書館の入社につながったものと考えられる。張は中国の伝統的古典教養だけでなく、西洋学問の造詣も深かった。左遷された身分でも当時として優れた知識人であったことに間違いはないであろう。基督教信者の夏瑞芳と儒学者の張元濟、一見全く異なった世界の人材がこうして手を携えることになったわけであるが、これが商務印書館を成功の道へと導く第一歩となったと指摘されている<sup>2)</sup>。

張元濟が入社した1902年に、商務印書館では編訳所が設置された。当時の商務印書館において、近代知識に関する出版物の多くは、日本を中心とした海外の出版物の翻訳本であり、訳文の編集作業を行うことが多かった。この編訳所で張は才能を十分に発揮することになった。編訳所には、ほかに高夢旦や蔣維喬、莊兪など、優秀な人材が活躍していた。高夢旦（1870-1936）は福建省生まれであり、浙江大学に勤めていた1902年には学生の引率として日本を訪問した。日本の振興は教育にあり、教育の基礎は小学校教育にあるという結論に達した高は、小学校の教科書編纂を志した。1903年に商務印書館に入って国語教科書の編纂責任者になった<sup>3)</sup>。蔣維喬（1873-1958）は江蘇省常州の出身であり、科挙を諦めて「新しい学問」の世界に入った。蔣は1903年に商務印書館に就職し、5月より教科書編纂業務に加わった。当時、蔣は編訳所に住み込んでいたようである。莊兪（1878-1940）は江蘇省武進の出身、1903（或いは1902）年に編訳所に入り、教科書の編纂など30年以上商務印書館に勤めた<sup>4)</sup>。

1902年から1903年に上述の人事が集中していることから、商務印書館の事業転換や規模拡大の決心が窺える。近代的教科書を作成する人材の確保に成功した商務印書館は、ほぼ同時期に金港堂という日本の出版社との合弁に踏み切ることとなった。そして1903年から1914年まで、11年間に及ぶ合弁時代を迎える<sup>5)</sup>が、この時期は、両社の順調な協力が功を奏し、事業のさらなる拡大を果たした。

## 1.2 有力出版社、金港堂の歩み

金港堂は1875年（明治8）に横浜で成立した出版社で、創業者は原亮三郎（1848-1919）であった。原は社の設立の翌年には、本社を横浜から東京の日本橋に移転させた<sup>6)</sup>。

1880年代後半に入ると、金港堂は全盛の時代を迎えた。それを促す外因の一つは明治政府による教科書検定制の実行であった。各県の教科書審査委員会の審査を受け、合格しなければ教科書の発行ができなかったのである。検定制の下におかれた出版社は制作・編集・編纂・発行など様々な面における高い能力が要求された。金港堂はこのような社会事情を十分把握し、それに先立って、独自の編纂部を成立させ、実力の高い編集・編纂チームを結成していた。

当時の日本の社会において教科書は特別な商品であり、利益は極めて大きいものであった<sup>7)</sup>。そのため、教科書審査は賄賂の温床になっていた。教育官僚から普通の教員までの広範囲に贈収賄がおこなわれていた結果、編纂部は賄賂に制作資金を奪われ、教科書の質は落ちる一方であった。教科書の利用者は犠牲になっていたのである。このことは当然、世間の強い怒りを買ひ、教科書書肆に対する不満が高まっていった。

1892年（明治35）12月に、司法当局は21社の出版社を対象に、一斉に家宅捜査を行った。日本近代教育史上の「教科書疑獄事件」である。多くの出版社と人物が検挙され、罰金や重禁錮の刑を受けたが、金港堂も捜査対象となり、摘発された<sup>8)</sup>。

教科書賄賂事件の直後に、教科書国定制度が定着し始め、当時の大手教科書出版社はほぼ排除されることになった。金港堂は事件後も長い間に経営を続けていたが、1911年頃の資本金は以前の三分の一にまで縮小し、「これは事実上、金港堂の終焉の意味をした」と指摘されている<sup>9)</sup>。最後に金港堂という名前が掲載されたのは1940年の『東京書籍商組合図書総目録9版』の記録である<sup>10)</sup>。

金港堂の経営は危機に瀕したように見えたが、実は疑獄事件の前の1890年代前半から、創業者の原亮三郎たちは新しい経営方針を探っていた。1900年（明治33）には中国への進出を図るため、中国人留学生に中国の教科書事情に関する意見を求めている<sup>11)</sup>。1903年11月頃から商務印書館と合弁するようになったのは決して偶然の出来事ではなかったのである。

### 1.3 商務印書館における日本人専門家

金港堂と合弁直後に商務印書館の編訳所では、二人の日本人専門家が顧問として加わり、よりよい教科書の編纂に努めた。東京高等師範学校教授であり、原亮三郎の友人であった長尾楨太郎、そして元文部省書記官出身で、金港堂の編輯部長であった小谷重である<sup>12)</sup>。

長尾楨太郎（1864-1942）は、号を雨山とし、明治時代の漢学者であった。熊本第五高等学校、東京高等師範学校、学習院などで長い間教壇に立っていた教育専門家でもある。長尾は金港堂の所属ではないが、文部省図書審査官の経歴から見ると教科書編纂において豊富な経験の持ち主であったと判断できる。長尾は東京帝国大学文学部（当時は文科大学と称していた）古典講習科卒であり、漢籍に造詣が深かったため、当時新しい教育の考察ために訪日した中国の鄭孝胥<sup>13)</sup>、黎庶昌<sup>14)</sup>などの文化人、官僚たちとよく筆談を行ったり、漢詩を作ったりして、周囲から尊敬される人物であった。清王朝の教育家である呉汝綸も1902年6月から10月までの日本視察の際に、日本の中学校における中国古典学問と西洋学問のバランスについて、長尾楨太郎に熱心に尋ねたことがあった<sup>15)</sup>。1903年に長尾は教科書疑獄事件によって高等師範学校を辞めて上海に移住していたようである<sup>16)</sup>。

小谷重（1874-?）については詳細が不明で、元文部省図書審査官、金港堂編輯部長だという経歴しか分かっていない。1903年11月に商務印書館の編訳所に入所した記録は存在する<sup>17)</sup>。

日本人専門家と共同で教科書を編纂していた当時の具体的な様子や内容については、さほど記録が残っていないが、中国側メンバーの蔣維喬の日記から若干窺うことができる。1930年代に発表した蔣の「編輯小学校教科書之回憶」が商務印書館の90周年を記念する冊子に収録されている<sup>18)</sup>。

蔣維喬の日記によると、1904年1月18日に、長尾楨太郎、小谷重の両氏が商務印書館に来館し、編集会議に参加したことが確認できる<sup>19)</sup>。商務印書館では、教科書編纂の理念、課程の設置、具体的な内容などについて、頻繁に編纂会議が開かれ、張元濟、高夢旦、蔣維喬、長尾楨太郎、小谷重など、日中の専門家たちの討論はしばしば半日或いは終日まで及んだと記録されている。議論の内容は極めて細かい時もあった。例えば、テキストに使用される文字として、「釜」を使用するべきか、それとも「鼎」を用いるか、一文字をめぐる徹底した議論が繰り返されたのである<sup>20)</sup>。

## 2 商務印書館教科書に見る日本の教科書編纂理念の影響

### 2.1 商務印書館教科書編集

『最新国文教科書』の編纂にあたって第一巻は、最も重要だという認識を共有した日中のメンバーは、いくつかの編集・編纂原則を定めた。例えば、文字の学習については、第一巻では文字の画数を厳しく規制する。第五課までは六画以下とし、第十課までは九画以下とする。その後、徐々に十五画まで増やしていくこととした。また、文字は日常的によく用いられる常用漢字を選び、常用漢字以外は選出しないことを定めた。第一巻では、第五課までの新しい漢字の数を十字までとする。そして、前課で学習した漢字は必ず後の課に入れて復習することなど、実に細かく決められていた<sup>21)</sup>。これらの学習内容はいずれもそれまでの中国の教材編纂理念にないものであり、中国側のメンバーに大きな衝撃を与えたことであろう。

教科書の編纂内容について、蔣維喬の日記の中に「附録日本人所擬蒙小学読本材料（日本人の起草する小学読本の材料）」と題する箇所がある。主な内容としては、次のような点が見られる。①挿絵について、必ず綺麗なものを選ぶ。さもなければ文章の品格が妨げられ、児童の興味を損ない、教育の効果に影響を生じる。②テキストとなる教材は広範囲から多様なものを選び、内容が偏らないこと。③各教材の配列のバランスに気を配ること。④教材の分類について、理科、農業、商業、工業、修身、地理、歴史、家事衛生のように、日本の尋常小学校読本の分類に従うこと<sup>22)</sup>。これらの内容は長尾楨太郎、小谷重が提案したものと考えられ、商務印書館の教科書作成の際に日本の小学読本を参考書物としていた有力な証拠と言えよう。

このようにして、1904年から1906年まで『最新国文教科書』はシリーズものとして、全十巻完成した。日本人の専門家の提案が生かされながら刊行に至ったと言ってもよからう。『最新国文教科書』には校訂者として、張元濟ら中国人編纂者の名と共に、「日本前高等師範学校教授長尾楨太郎」、「日本前文部省図書審査官小谷重」と、日本人編纂者の名前が記載さ

れている<sup>23)</sup>。

さらに商務印書館では1906年に『最新初等小学校国文教科書』という、『最新国文教科書』に類似したタイトルの教科書を出版している。『最新初等小学校国文教科書』には編纂者の名は記されていないが、「編輯大意」という部分に編纂の原則や方針が箇条書きで挙げられている。教材の分かりやすさ、児童の興味の喚起、挿絵の重要性など、蔣維喬日記の「日本人の起草する小学読本の材料」とほぼ一致している。日本人の専門家の編纂方針が、この教科書の「編輯大意」において文章化されたと考えられよう<sup>24)</sup>。

## 2.2 商務印書館教科書に見る日本教科書の影響

金港堂は1895年(明治28)より一般書籍の出版から教科書出版に切り替えた。そのため、金港堂らしい教科書の編纂理念を担当者が強く意識していた。金港堂より派遣された長尾慎太郎と小谷重は、ともに文部省図書審査官でもあったため、日本の教科書事情に熟知していたといえる。編纂者の教科書の質への執着と、金港堂と商務印書館、二社の合弁経営に対する意気込みが推察できよう。

金港堂の教科書編纂の理念は、同社の他の出版物からも見出すことができる。例えば、国語教材について、棚橋源太郎著『小学校各科教授法』では「国語科教授の内容的方面とは、其の言語、文書の表す思想感情にして、修身、地理、歴史、理科等に関する材料を含めり(中略)文字には仮名と漢字とあり、此等は成るべく日常必須のものに限り、其の排列は文字の難易、文法上の順序等に依らざるべからずと雖も、尋常科の読本に在りては主として実質的材料の順序に依り、児童の心理的要求に合せんことを要す。(中略)成るべく平易なる普通国文にして、談話体及び文章の模範たるに足り、且勉めて美文的、文学的のものを擇ぶべきなり」<sup>25)</sup>と記されている。この『小学校各科教授法』で取り上げられた教材・教授法は商務印書館の教科書編纂にそのまま反映されたといえる。

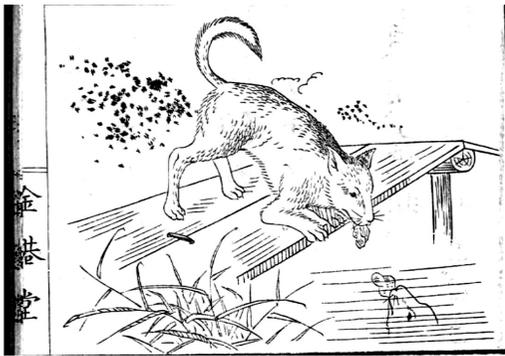
そのため、『最新国文教科書』シリーズ全巻では内容だけでなく、イラストについても日本の教科書である『小学校尋常読本』の影響がはっきりと確認できる結果となった。以下、いくつかの例を見てみよう。

### 2.2.1 肉を銜<sup>くわ</sup>えた犬

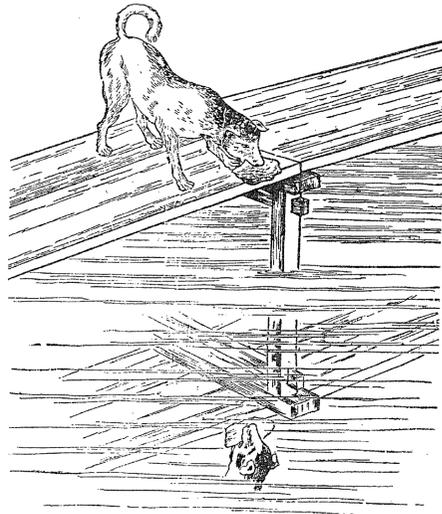
当時流行したイソップ寓話の中で、「影に向かって吠えた犬」は日本の教科書において最も多く採用されたものである<sup>26)</sup>。金港堂出版の『小学尋常科読本』第五巻、第二十九課には「或ル處ニ一ツノ犬アリ。此ノ犬ハ甚ダ欲深クシテ、肉サヘ見レバ盗ミ去レリ…大慾ハ無慾ニ似タリトハ、カカル事ヲヤイフナラン」<sup>27)</sup>とあり、『最新国文教科書』(第二冊)、第四十課の「犬銜肉」は「一犬銜肉、過橋上、見水中有犬、口亦銜肉、思並得之…」<sup>28)</sup>となっている。

イソップ寓話の一節であるため、内容がほぼ一致していることは言うまでもない。注目す

べきは両方の教科書の挿絵であり、構図まで酷似しているのである。当時商務印書館は教科書事業を開始したばかりであり、教科書のあり方についてまだ模索中であつた。挿絵は教科書を構成する重要な部分であるだけに、絵師が金港堂の挿絵を真似して作業したであろう姿が想像できる。しかしよく見ると、商務印書館の挿絵は犬と水面の影をはっきりと描いているが、周囲に植物などがなく、若干単調な挿絵となっている。一方、金港堂のほうを見ると、犬は前足を曲げ、体の前半が水に近づこうと屈んでおり、肉がほしい気持ちが絵から伝わってくる。児童にとっては、やはり後者の金港堂の挿絵のほうが面白く、文章の場面理解に役立つと言える。商務印書館の挿絵は金港堂の構図の真似はできたとしても、文章を引き立たせるテクニックについては、未熟であつたといえる。



中根淑閔、原亮策著『小学尋常科読本』  
第五卷、第二十九課、金港堂書籍 1888年



李保田主編『開山老課本』対外経済貿易大学出版社、  
2012年(『最新国文教科書』第二冊 第四十課)

### 2.2.2 「狼少年(うそをつく子供)」

「狼少年(うそをつく子供)」もイソップ寓話にもとづく話である。『小学尋常科読本』第五卷、第三十三課には「有ル事ヲ無シトイウ事モ詐ナリ。無キ事ヲ有リトイウ事モ詐ナリ…」<sup>29)</sup>とあり、『最新国文教科書』(第四冊)、第九課「牧童証語」には「牧童驅羊于近村、大呼狼至。村人争出、覓狼、無所得…」<sup>30)</sup>とある。金港堂の挿絵は洋風の子供であるのに対して、商務印書館のほうは教科書が出版された当時の中国のごく普通の子供になっている。『最新国文教科書』の第四冊になると、挿絵の質が、第二冊の「肉を銜えた犬」より、かなり改善されたことが分かる。

イソップ寓話は明の時代にキリスト教の宣教師たちによって伝来し、中国から日本へと伝わったと言われている<sup>31)</sup>。しかし、イソップ寓話が、一般常識として、現代中国人の価値観の一部になったのは、やはり近代初等教育における教科書の普及の結果であろう。ここに

も日本の教科書の多大な影響が存在しているといえる。



中根淑閔、原亮策著『小学校尋常科読本』  
第五巻、第三十三課、金港堂書籍 1888年



李保田主編『開山老課本』對外經濟貿易大学出版社、  
2012年（『最新国文教科書』第四冊 第九課）

### 2.2.3 「熊の忠告」

「熊の忠告」もイソップ寓話出自の話である。『小学尋常科読本』第八巻、第七課「熊の忠告」には「或る深山ハ熊多く棲みけるが、一日ふたりの旅人連立ちて、此の山を過ぎんとて…」<sup>32)</sup>とある。『最新国文教科書』（第六冊）、第四十四課「遇熊」には「二人同遊山中、忽遇大熊、其一急登樹、以葉自蔽…」<sup>33)</sup>とある。

これら2冊の教科書には挿絵がない。『最新国文教科書』第六冊になると、児童の言語理解能力が向上したことから、挿絵を少なくし、文字だけの教材テキストを増やす編纂方針によるものであろう。イソップ寓話は生活の知恵が多く凝縮されていることから明治時代の日本の教科書に多く掲載されていた。この特徴が商務印書館の教科書にも表れていることから、日本人編纂者の強い意向が反映される形で教科書編纂が行われていた実態を裏付けることができる。

上述のようにイソップ寓話から「肉を銜えた犬」、「狼少年」、そして「熊の忠告」が、それぞれ『最新国文教科書』第二冊、第四冊、第六冊に導入されている。教科書の巻数が進むにつれて、話の難易度や意味合いが徐々に深まるように考慮されている。これは、児童の学習能力や文章の理解力に合わせた学習教授方法であり、『小学尋常科読本』における教材テキストの順番と一致している。

#### 2.2.4 埒保己一

埒保己一<sup>はなわ ほ きいち</sup>（1746-1821、延享3-文政4）は江戸時代の国学者である。保己一は幼少時に視力を失ったが、大変な努力の結果、学者になった。埒保己一という名が現代の日本人にはそれほど知られていない名前であるように、現代中国でも彼の名を知る者はほとんどいない。しかしながら、埒保己一の名前は商務印書館の教科書には登場するのである。

『小学尋常科読本』第六巻、第九課「埒保己一」には「盲人ノ事ニ就キテ、汝ニ語り聞カスベキ美談アリ、今ヨリ百年前ニ埒保己一ト云ヒテ世ニ勝レタル学者アリ…」<sup>34)</sup>とあるが、『最新国文教科書』（第八冊）、第二十四課は「埒保己一」となっており、「日本有埒保己一者、年七歳、喪明。十五、乃矢志向学…」<sup>35)</sup>と記されている。

文章の内容や構成においては、若干の編集がおこなわれているが、「不自由ノ身ニテスラ、勉ムルトキハ勝レタル人トナルナリ」<sup>36)</sup>という内容は共通しており、児童の学習意欲を引き立たせるものである。日本人国学者の事例を教科書に取り入れているのは、日本人編纂者の働きかけによる結果であることは間違いない。当時の中国は全般的に日本の教育制度を模倣する時期にあったが、日中間で爆発的に展開された知的交流が教科書にまで及んでいたことを考えると、中国の近代化における日本の多大な影響を改めて思い知らされる。

#### おわりに

清末の中国において、外国の教科書を無造作に中国語に翻訳する現象が多く見られた。それに対して、商務印書館では日本の教科書出版社であった金港堂と提携し、日本の初等教育教授法を参考にしつつも、当時の中国の状況に合わせた教科書編纂に励んだといえる。この商務印書館の教科書編纂事業は一民間企業の試みであった。それにもかかわらず、その後清朝政府の政策にまで影響を及ぼし、全国範囲の教科書づくりの手本になる。商務印書館の教科書編纂事業は、中国の教育史上に大きな意義をもったといえる。

『最新国文教科書』全十冊は従来の基礎教育となった儒学などの古典啓蒙書籍とは全く異なる教材であった。その学習方法は、筆画が平易なものから複雑なものへ、文章が短いものから長めのものへ、意味の易しいものから深いものへと徐々に難易度が変化していくものである。これは、近代日本の初等教育における教科書の編纂理念が影響している。

教科書の教材テキストとしては、歴史、地理、博物などに関する内容も導入した。児童に対し、自国についてだけでなく、世界についても関心を向けさせるためである。教科書の

編纂者の意図としては、児童が文字の習得と知識の吸収によって世界を深く理解し、新しい世界文明に飛び込むように導くことが狙いであったといえる。

## 註

- 1) 張樹年『張元濟年譜』商務印書館、1991年。
- 2) 汪家熔『民族魂氏—教科書変遷』商務印書館、2008年、102-105頁を参照。
- 3) 汪家熔輯注、宗原放主編『中国出版史料』第三卷、湖北教育出版社・山東教育出版社、2004年。
- 4) 蔣維喬と莊俞については、王建军『中国近代教科書發展研究』廣東教育出版社、1996年、116-117頁を参照。
- 5) 汪家熔『商務印書館史及其他—汪家熔出版史研究文集』中国書籍出版社、1998年。
- 6) 稲岡勝「金港堂小史—社史のない出版「史」の試み」東京都立中央図書館『研究紀要』第11号、昭和54年。
- 7) 稲岡勝「明治検定期の教科書出版と金港堂の経営」東京都立中央図書館『研究紀要』第24号、1993年。
- 8) 稲岡勝「金港堂小史—社史のない出版「史」の試み」東京都立中央図書館『研究紀要』第11号、1979年。
- 9) 同上。
- 10) 同上。
- 11) 稲岡勝「明治検定期の教科書出版と金港堂の経営」東京都立中央図書館『研究紀要』第24号、1993年。
- 12) 汪家熔『商務印書館史及其他—汪家熔出版史研究文集』中国書籍出版社、1998年。
- 13) 同上。
- 14) 中村忠行「検証：商務印書館・金港堂の合辦（一）」『清末小説』1989年12号、110頁を参照。
- 15) 呂達『中国近代課程史論』人民教育出版社 1990年、173頁を参照。
- 16) 樽本照雄『初期商務印書館研究』増補版、清末小説研究会、(2004年5月)、138頁を参照。
- 17) 張樹年『張元濟年譜』商務印書館、1991年。
- 18) 蔣維喬「編輯小学校教科書之回憶」、商務印書館編『1897 - 1987 商務印書館九十年』1987年、55-61頁。
- 19) 沢本香子「蔣維喬と日本人—蔣維喬日記から」『清末小説』1990年13号、43頁を参照。
- 20) 蔣維喬「編輯小学校教科書之回憶」、商務印書館編『1897 - 1987 商務印書館九十年』商務印書館、1987年、61頁。
- 21) 同上、58頁。
- 22) 沢本香子「蔣維喬と日本人—蔣維喬日記から」『清末小説』1990年13号、44-45頁を参照。
- 23) 商務印書館編『最新国文教科書』第一卷、1904年。
- 24) 汪家熔輯注、宗原放主編『中国出版史料』第二卷、湖北教育出版社・山東教育出版社、2004年、536頁を参照。
- 25) 棚橋源太郎『小学校各科教授法』金港堂書籍、1903年。
- 26) 小堀桂一郎『イソップ寓話』中央公論社、1978年。
- 27) 中根淑閔、原亮策『小学尋常科読本』金港堂書籍、1888年。
- 28) 李保田主編『開山老課本』對外經濟貿易大学出版社、2012年。

- 29) 中根淑閔、原亮策『小学尋常科読本』。
- 30) 汪家焜輯注、宗原放主編『中国出版史料』第二卷、湖北教育出版社・山東教育出版社、2004年、536頁を参照。
- 31) 内田慶市編『漢訳イソップ集』（文化交渉と言語接触研究・資料叢刊3）ユニウス、2014年、5-41頁を参照。
- 32) 同上。
- 33) 李保田主編『開山老課本』。
- 34) 中根淑閔、原亮策『小学尋常科読本』。
- 35) 李保田主編『開山老課本』。
- 36) 中根淑閔、原亮策『小学尋常科読本』。